

残業を終えて帰宅する佐藤直樹の足取りは重かった。深夜0時を回り、東京の街はすっかり静まり返っている。35年の人生で、こんなにも疲れ切ったことはないと思えるほど、心身ともに消耗していた。

「はあ...今日も残業か...」

大手商社の営業部課長として、直樹は常に完璧を求められる立場にいた。部下たちの面倒を見ながら、自身の営業ノルマもこなさなければならない。独身であることが、会社にとっては都合の良い使い捨ての駒として扱われる理由になっているのかもしれない。

地下鉄の駅から自宅マンションまでの道のりは、普段なら15分ほどで着く距離だ。しかし今夜は足が重く、いつもより時間がかかりそうだった。

「このままじゃ...人生終わっちゃうな...」

暗い路地裏を歩きながら、直樹は独り言を呟いた。35歳にして持ち家もなく、貯金も思うように増えない。恋愛経験も乏しく、このまま一生独身なのではないかという不安が常につきまとっていた。

そんな憂鬱な気持ちで歩いていると、突然、異変が起きた。

「な...なんだ!？」

足元から不思議な光が漏れ始めたのだ。まるで魔法陣のような幾何学模様が、アスファルトの上に浮かび上がる。直樹は思わず足を止めた。

「これは...一体...」

光は次第に強さを増し、直樹の体を包み込んでいく。逃げようとしても、体が動かない。

「や、やめろ! 誰かー!」

必死に叫ぶ声も、誰にも届かない。光に包まれた瞬間、意識が遠のいていく。最後に見たのは、月明かりに照らされた夜空だった。

* * *

「...目を覚ますがよい、地球の者よ」

耳に届く声は、どこか神々しく、かつ妖艶な響きを持っていた。直樹はゆっくりと目を開ける。

そこは見たことのない広間だった。天井は高く、壁には得体の知れない文様が刻まれている。床は透明な水晶のように輝いており、その下には星々が瞬いているように見える。

「私はアルテミス。異世界魔術評議会の長を務めるものだ」

直樹の目の前に立っていたのは、銀髪の長い美しい女性だった。年齢は20代後半に見えるが、その瞳には何百年もの時を重ねてきたような深い色合いがある。

「な...何なんですか、これは...」

直樹は困惑しながら周囲を見回した。広間には他にも数人の魔術師らしき人物たちが立っている。全員が不思議な衣装を身にまとい、杖のようなものを手にしていた。

「我々の世界は、今や深刻な危機に瀕している」アルテミスは厳かな口調で語り始めた。「魔力が枯渇し、このままでは文明が崩壊してしまう。その解決策として、我々は地球の少女たちの持つ特殊なエネルギーを必要としているのだ」

「少女...？僕に何の関係が...」

「お前には、我々の救世主となってもらおう」

アルテミスが杖を掲げると、直樹の体が再び光に包まれ始めた。今度は、体の内側から何かに変化していくような、不思議な感覚が全身を支配する。

「あ...ああっ...！」

まず最初に感じたのは、全身の筋肉が溶けていくような感覚だった。腕の筋肉が萎んでいき、がっしりとした体つきが徐々に細くなっていく。背丈も縮んでいき、床との距離が遠くなっていくのを感じる。

「う...うっ...！」

骨格が軋むような音を立てながら小さくなり、肌の質感が変化していく。これまで男性らしい硬さのあった皮膚が、まるで赤ん坊のように柔らかく、滑らかになっていった。

「こ、これは...！」

股間に激痛が走る。そこにあるべきものが、まるで体の内側に吸い込まれていくような感覚。これまで経験したことのない痛みと快感が同時に襲ってきた。

「はあっ...んっ...！」

陰嚢が裂けるような痛みとともに、そこが膣口へと変化していく。これまでなかった場所に新しい器官が形成される感覚に、直樹は戸惑いと共に言いようのない興奮を覚えた。

胸に痺れるような刺激が走る。平らだった胸が徐々に膨らみ始め、乳首が敏感になっていく。シャツの布地が擦れるだけで、ゾクゾクとした快感が走った。

「く...うう...！」

顔立ちが変化していくのを感じる。顎の骨格が小さくなり、目が大きくなっていく。唇が柔らかくなり、鼻筋が通って可愛い形に。髪の毛が急速に伸び、首筋をくすぐる。

「や...やめてくれ...！」

声を上げると、それはもう少女のような甲高い声に変わっていた。喉仏が消え、声帯が変化したのだ。

全身の変化が進むにつれ、これまでにない感覚が体を支配していく。特に新しくできた性器は異常なまでに敏感で、わずかな刺激でも快感が走った。

「はあ...はあ...」

変身が完了する直前、全身を貫くような強烈な快感が走る。まるで絶頂のような快感が、新しい体を震わせた。

変身が完了すると、小学5年生くらいの少女となった体は、床に崩れ落ちた。

「鏡を見るがよい」

アルテミスが差し出した鏡に映っていたのは、見覚えのない少女の姿だった。長い黒髪はツインテールに結われ、大きな瞳には戸惑いの色が浮かんでいる。幼さの残る整った顔立ちは、まるで人形のように美しい。

「これが...僕...？」

声を出して、自分の声の変化に驚く。か細く、甘い声は、かつての低い男性の声からは想像もできないものだった。手を動かすと、しなやかで細い指が鏡の中で動く。

体を動かすたびに、新しい感覚が襲ってくる。胸の膨らみが揺れる感触、太ももが擦れ合う感覚、そして股間の違和感。すべてが新鮮で、戸惑いと共に奇妙な興奮を覚えた。

「お前は今から、魔法少女として我々の世界を救う使命を担うのだ」

アルテミスの言葉に、少女となった直樹は震える声で問いかけた。

「どうして...僕なんかが...」

「お前には強い適性がある。それに...」アルテミスは意味ありげな微笑みを浮かべた。「もう後戻りはできないのだよ」

直樹は自分の新しい体を見つめながら、これからの運命に思いを巡らせた。男性としての35年の人生が、たった一晩で覆されてしまったのだ。そして何より恐ろしいのは、この新しい体が徐々に快感を覚え始めていることだった...

「さて、これからお前に魔法少女としての力を授けよう」

アルテミスが手にした杖を掲げると、直樹の目の前に小さな水晶が浮かび上がった。バラの蕾のような形をした、淡いピンク色の結晶だ。

「これは...なんですか？」

「魔法少女の証。お前の魔力の源となるものだ」

震える手で水晶に触れようとした瞬間、結晶が眩い光を放ち、直樹の胸に吸い込まれていった。

「んっ...！」

その瞬間、全身に電流が走ったような衝撃が走る。特に、新しくできた性器が強く反応し、思わず膝が震えた。

「ふふ...早速、体が反応しているようだね」

アルテミスの言葉に、直樹は顔を赤らめる。確かに、体の奥から湧き上がってくる甘い疼きは、これまで経験したことのないものだった。

「この感覚は...一体...」

「魔力は性的エネルギーと密接な関係があるのだよ。魔法少女たちは、その快感を力に変換して戦うのだ」

「え...？」

その時、アルテミスが再び杖を振りかざした。すると、直樹の体が再び光に包まれ、着ていた会社のスーツが消え失せる。

「ちょ、ちょっと！」

慌てて体を隠そうとする直樹だったが、次の瞬間、新しい衣装が形作られていった。

フリルたっぷりのピンクのドレスが体を包み、白いニーハイソックスと可愛いメリージェーンシューズが足元を飾る。手には小さな魔法の杖が現れ、髪飾りとしてリボンが追加された。

「これが...魔法少女の姿...」

鏡に映る自分の姿に、直樹は言葉を失った。か弱く、愛らしい少女の姿。スカートの裾が風に揺れる感覚も、靴下が太ももを締め付ける感触も、すべてが新鮮だった。

「さあ、試してみるがいい。魔法の力を」

アルテミスの促しに従い、直樹は恐る恐る魔法の杖を掲げる。すると...

「はあんっ...！」

予想もしない快感が全身を貫いた。杖から放たれる魔力が、まるで愛撫されているかのような快感となって体中を駆け巡る。特に、胸と股間が強く反応し、甘い疼きが止まらない。

「くう...んっ...」

「そう、その感覚を覚えておくのだ。これからお前は、快感と魔力を同調させながら戦うことになる」

直樹は膝をつきながら、荒い息を吐く。男性だった時には感じたことのない快感の波が、まだ体の中を巡っていた。

「で、でも...僕には無理です...こんな体で...」

「心配することはない。これから特訓が始まる。そして...」

アルテミスは不敵な笑みを浮かべた。

「明日からは、小学校にも通ってもらうことになる」

「え...?」

「佐藤ゆずは。これがお前の新しい名前だ。明日から城南第一小学校の5年2組に転校する」

「ちょ、ちょっと待ってください!」

直樹...いや、ゆずはは必死に抗議する。しかし、すでに体は少女のものとなり、快感にも反応するようになっていた。これが新しい現実なのだと、否応なく突きつけられる。

「さあ、これからが本当の始まりだ」

アルテミスの言葉が、広間に響き渡った。直樹の、いや、ゆずはの新しい生活が、今始まろうとしていた....。